

大会趣旨

言語聴覚士（ST）が活躍する場は「多様性」に満ちています。STの対象者は多種多様な価値観や属性（年齢・性別・学歴・宗教・職務経験・嗜好など）を有しています。私たち臨床家も同様です。ST臨床の現場は、コミュニケーション障害から摂食嚥下機能障害、聴覚障害、発達障害など多様です。その臨床の礎石となる学問は、言語聴覚療法学を始めとし、リハビリテーション医学、聴覚障害学、発声発語障害学、発達障害学、言語学、心理学など数多く極めて学際的です。

STの生業は、多種多様な臨床活動を介して、複眼的な視点を養い、臨床の識別力を高め、多彩な治療手技の中から最適格を選択する「技」を磨きます。学術面では、様々な年代や養成校の出身者とともに、学問としての「知」を高め会い、さらに新たな礎を築いていきます。

ST一人ひとりが、こうした言語聴覚療法の「多様性」に意識を向けることで、STとしての社会的ネットワークが拡大し、他職種との差別化や競争力の向上、専門職としての強みにつながります。

「多様性」は、私たち臨床家が成長するための重要な概念です。

本会では、この多様性を軸にSTの可能性を再考し、科学性に富んだ“多様な企画”を準備しました。

市民公開講座では、特定医療法人フェニックス会長の長縄伸幸先生に、「共生社会の実現に向けて」と題して、多様性に富んだ患者さんに保健・医療・福祉のすべての分野を総合的に支援することの重要性と実際についてご講演いただきます。

特別講演は、昨今ニーズが高まっている「在宅療養支援」をテーマに、坂井謙介先生（坂井歯科医院）に、歯科医師の立場から言語聴覚士に期待される実践活動についてご提言いただきます。

シンポジウムでは、女性や子ども・貧困問題など幅広い分野で活躍しているルポライターで、自らも高次脳機能障害の当事者として力強い情報を発信している鈴木大介氏を招いて、高次脳機能障害者の社会支援活動の実際と課題について、会場フロアの皆様と一緒に考えます。

ハンズオンセミナーでは、牧野日和先生（愛知学院大学）に「実践！実食！明日から使える嚥下機能評価」として、特殊な嚥下食弁当の実食を通して、臨床に必要な評価やアプローチ法を学んでいただきます。

臨床カンファレンスでは、「その症状？正しく評価できていますか？」と題して、主に臨床経験5年未満の臨床家を対象に、田中康博先生（愛知学院大学）にご指導をいただきながら、実際の患者さんの臨床記録を用いた実践的な模擬臨床カンファレンスの醍醐味を味わっていただきます。

臨床現場の最前線では、流暢症に対する独自の取り組みが学会やマスコミ等で注目されている羽佐田竜二先生（つばさ吃音相談室）に、小児期発症流暢症に対する最新治療法の実

際について報告していただきます。

企業紹介のコラボ企画として、視覚・聴覚発話刺激に対応した言語機能支援アプリケーション・ソフト（SAT for Windows OS）について、(株)シスネット開発部と勝野由大先生（名古屋市立大学）に実機を用いながらアプリの臨床的有益性についてご教授いただきます。

招待講演では、「聴こえ」にお困りの方とご家族に“笑顔”を届けていただいている、さくら補聴器の井上賢二先生に、「訪問補聴器相談」の活動についてご報告いただき、ST が理解しておくべき補聴器の適切なメンテナンスや調整について学びたいと考えます。

第 17 回愛知県言語聴覚士学術集会が、皆様にとって ST 臨床の「多様性 diversity」を再認識し、無限の「可能性 possibility」を感じながら、日々の臨床に「科学 science」の視点を包摂する契機となれば望外の喜びです。

実行委員一同、コロナ感染症対策に細心の注意を払い、多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。

第 17 回愛知県言語聴覚士学術集会
大会長 辰巳 寛